



②旧安部家住宅と屋敷 及び収蔵資料

[町指定有形文化財・建造物]

河北町

江戸時代、紅花生産者(豪農)として活躍した安部権内家の屋敷。東西85m・南北62mの広大な屋敷地を誇る。黒板塀と屋敷林に囲まれ、入口には見張りを兼ねた火番小屋があり、櫓の表門(薬医門)を入ると寄棟造りの豪壮な母屋がある。その北隣の座敷蔵とともに天保末年(1844年)の建造。六角の掘り抜き井戸がある庭園と、奥には2階建ての新座敷があり、大勢の賓客を迎えた離れとして大正期に建てられた。いずれも江戸期から明治・大正に至る豪農の屋敷の佇まいを色濃く残している。民具や美術品、古文書なども保存されており、平成27年(2015年)町の文化財として指定された。紅花資料館の堀米家と並ぶ貴重な歴史的建造物である。



③旧柏倉家住宅及び 収蔵資料

[国指定重要文化財・建造物]

中山町

江戸時代、紅花生産者(豪農)として活躍した柏倉家の屋敷。柏倉家は、承応年間(1652~55年)に山形市柏倉(当時柏村)から移住し、山形城主が堀田氏だった頃に組村高6,700石の大庄屋になった家柄である。邸内・外の敷地は約2,300余坪、建物は約360坪。東向きの長屋門を入ると、正面に主屋、南に廊下でつながった2棟の土蔵がある。手前の仏蔵には東本願寺を縮図にしたという仏間があり、その先の座敷蔵に上方由来の雛人形をはじめ数多くの調度品が残っている。北側には4,500俵の米が収納できる北倉があり、母屋と奥には家蔵がある。五人官女で構成された雛人形は珍しく、雛道具も江戸時代に京都でつくられたもの。毎年3月には、ひなまつりを開催している。



④ふるさと資料館及び 収蔵資料(旧佐藤家)

山辺町

佐藤清五郎家の土蔵と敷地を利用して設立された資料館。佐藤家は、江戸時代に紅花、青苧などを幅広く扱う商人(豪農)として活躍し、米沢行荷物請払問屋などとして酒田や荒浜(宮城県亘理町)を拠点に各地で幅広い商業活動を行っていた。池を巡らせた敷地内には3つの蔵がある。門を入り受付の先に北蔵があり、1階は様々な企画展の会場、2階は古代から現代までの当地の歩みについての展示会場になっている。南蔵は蔵座敷としての佇まいをそのまま見学できるようになっており、西蔵は東屋の奥の右手にあり、昔の生活用具の展示会場になっている。享保雛や古今雛、紅花染め衣装などが残り、「染めと織り」の繊維に関する資料も展示している。



25 次郎左衛門置上げ立雛

[町指定有形文化財・工芸品]

河北町

紅花交易によって上方からもたらされた華やかな雛人形が当地には数多く残っている。本品は京都の人形師初代雛屋次郎左衛門の作で、丸顔、引き目、かぎ鼻、朱点の口が特徴。「置上」とは、紙で裏打ちした布の肩・裾・帯の部分を胡粉（貝殻の顔料）で盛り上げて表現する技法。毎年月遅れの4月の谷地ひなまつりで公開される。

26 享保内裏雛

[町指定有形文化財・工芸品]

河北町

男雛は座高86.5cmと大振りだが、肩肘を張らない座り姿が自然体で魅力的だ。烏帽子・衣装は後世の着せ替えとはいえ、男雛、女雛とも顔の胡粉磨きや眉目の描き方が実に見事で、衣装も華やかな雛人形である。紅花商人だった旧家が所有していたもので、上方との交流で栄えたことを示す貴重な文化財である。



27 御所人形

[町指定有形文化財・工芸品]

河北町

江戸中期頃から愛玩用や贈答用に作られたといわれ、幼児をかたどった木彫や桐型の本体に真っ白な胡粉を塗り重ねた人形。丸々とした三等身に紅花染めの着せ替え衣装をまとっている。小さな手足にちんまりした目鼻立ちで、あどけない顔つきの中にも気品がある。左は玉手箱を持つ「浦島太郎」で、右は軍扇を握った「天下取り」。

28 からくり人形

[町指定有形文化財・工芸品]

河北町

旧家に伝わるぜんまい仕掛けの人形。写真の「かえんだいこ火焰太鼓」のからくり人形は、ぜんまいの取っ手を回すと台上の人形（楽人）が締太鼓を打ち鳴らし、回転して舞や演奏の仕草を始める。同家にはもう一つ「さんばんそう三番叟」のからくり人形が伝わっており、同様に取っ手を回すと、人形が鈴を鳴らしたり、体を曲げたりして舞う。いずれの人形も高さ24cmで、紅染の衣装をまとっている。天保年間、金沢の人の作と考えられている。





30 ひな市 (ひなまつり)

山形市 寒河江市 天童市 尾花沢市
山辺町 中山町 河北町 大石田町

江戸時代、山形は京都など上方との紅花交易が盛んであった。その帰り荷として運ばれ各地に残り、当時の繁栄ぶりを物語るのが雛人形。毎年2～4月には各地で開催されるひな市に合わせ、旧家の母屋や座敷蔵などが開放され、古色蒼然とした中にもあでやかな時代雛が数多く公開される。旧家の門をくぐり庭を伝って座敷蔵に入ると、そこはタイムスリップしたかのような別世界。天井に届くほどの段間飾りが目を見張る。また、ひな市では通りにお雛様やお菓子などの露店も並び、多くの人でにぎわう。ひな市は春の風物詩である。このひな市と一緒に、春の節句にちなんだ様々な行事が、資料館ほか神社(ひな供養)や料亭(吊るし雛)などで見られる。



31 林家舞楽

[国指定重要無形民俗文化財]

河北町

近世の舞楽由緒に、林家は「古来、山寺日枝・慈恩寺山王・平塩熊野・谷地八幡等四社の舞楽を司ってきた」とある。大坂天王寺の楽人・林越前政照が貞観2年(860年)に慈覚大師(円仁)に従い山寺立石寺に移り住み、根本中堂で奉納したのが始まり。その後大永元年(1521年)頃慈恩寺に移り、江戸時代の初期に谷地八幡宮へ移った。1,100余年にわたり林家神職が一子相伝に継承してきた国指定の舞楽である。現在、谷地八幡宮では9月の例大祭(谷地どんがまつり)で、また慈恩寺では5月5日の一切経会でそれぞれ本堂前の楼上で厳かに奉奏される。紅花染めの装束が用いられ、古代歌劇「陵王」などが演じられる。

知っておきたい基礎知識② 紅花の「赤」が持つ意味

昔の人は、「太陽」、「火」、「血液」などを連想される「赤」に特別な意味を付与し、大変尊んできた。「太陽=あか」とする国は珍しく、日本人にとって特別な色といえる。神聖な色として「神を宿す」目的で、建前の時に柱につけたり、神事の際に化粧として用いてその姿で舞を舞ったり、神の言葉を告げたりして

きた。その神の力を借りるため「赤」に願いを込めて、様々な場面で着物や化粧に使われるようになったという。

また、古くからおめでたい色として、赤飯や紅白の水引、達磨などの縁起物に使われ、「赤」の語源である「明」の字の、晴れやかな明るいイメージにつながったとされている。

